

3. 核家族と妊娠, 分娩, 異常児発生

東京大学医学部産婦人科

水野正彦・佐藤孝道
箕浦茂樹・荻野満春

研究目的

核家族化に伴うさまざまな問題点が指摘されはじめて久しいが、それが妊娠, 分娩, 異常児発生に及ぼす影響を多方面から検討した報告は少ない。本研究の目的は、核家族化に伴うどのような問題が、妊娠, 分娩, 異常児発生に及ぼす影響を与えるかを多面的に検討した。母子保健行政のみならず、現場で行なわれている母親学級などにも役立つような具体的な分析を行なうことにある。

研究方法

北大, 東北大, 東大, 名大, 京都府立医大, 近畿大, 広大, 久留米大の合計8機関から集められた昭和55年度の分娩総数1,254例について、核家族の妊娠, 分娩, 異常児発生に及ぼす影響をコンピューターを用いて検討した。核家族化に伴う諸条件としてとりあげた項目は、居住家屋の種類, 職業の有無, 妊娠中の旅行の有無, コーヒーの嗜好などである。

研究結果

- (1) 集計した1,254例について、その同居家族の分布をみると、本人も含め2人の場合が最も多く、3人、4人がそれに続く(平均3.2±1.3人)。同居家族の内訳では、夫と同居97.8%、子供との同居51.0%、夫の両親(または片親)との同居18.5%、夫の兄弟との同居4.2%、本人の両親(または片親)との同居3.4%、本人の兄弟との同居1.0%、その他との同居2.6%であった(図-1)。今回は、このうち症例数が充分で統計的に検討しうる子供の数(なし、1人、2人の3群)ならびに夫の両親との同居の有無(同居なし、母親のみと同居、両親と同居の3群)が、今回の妊娠, 分娩, 異常児発生に与える影響について検討した。
- (2) 妊娠, 分娩, 異常児発生に関与し得る諸条件と子供の数との関係を見ると、まず子供の数が増加するとビル居住から一戸建に移る傾向があり(一戸建居住頻度; 子供なし66.2%, 子供1人73.2%, 子供2人75.0%)、また職業婦人の数も減少した(子

供なし40.8%, 子供1人18.0%, 子供2人20.5%)。また、コーヒー嗜好者も増加傾向を示した、(子供なし36.7%, 子供1人45.0%, 子供2人51.3%)が、妊娠中の旅行の頻度は、子供の数の影響をほとんど受けないように思われた。子供の数と妊娠経過についてみると、子供の数が多くなると切迫早産の頻度が高くなる傾向があった(子供なし4.1%, 子供1人5.0%, 子供2人7.7%)。妊娠中毒症の発生は子供のいない場合にやや高かった(子供なし11.3%, 子供1人7.1%, 子供2人7.0%)。前期破水の頻度についてみると、子供の数が多い程低かった(子供なし15.6%, 子供1人10.1%, 子供2人8.3%)。子供の数と分娩様式の関係については、子供の数が多くなる程自然分娩例は増加傾向を示し、産科手術を必要とする例は減少した(子供なし72.3%, 子供1人85.5%, 子供2人91.0%)。その他の分娩様式の概略は(表-1)に示した。子供の数の増加に伴って、母体平均年齢は高くなり、分娩時間の短縮, 分娩時出血の減少, ならびに新生児体重の軽度の増加が認められた。

- (3) 妊娠, 分娩, 異常児発生に関与し得る諸条件と夫の両親との同居の有無については、夫の両親と同居する場合には、一戸建住宅に住んでいることが多く(同居なし64.8%, 母のみと同居92.3%, 両親と同居94.7%)、職業婦人も多くなる(同居なし28.3%, 母のみと同居44.6%, 両親と同居36.8%)。妊娠中の旅行は、夫の両親と同居する場合やや減少する(同居なし36.4%, 母のみと同居35.4%, 両親と同居31.6%)。コーヒー嗜好にはほとんど影響がなかった。次に、妊娠経過についてみると、同居する場合に、切迫流産(同居なし6.2%, 母のみと同居6.2%, 両親と同居2.6%)、切迫早産(同居なし5.1%, 母のみと同居1.5%, 両親と同居3.3%)がともに低くなる傾向があった。また、分娩についてみると、夫の両親と同居する場合には、分娩誘発の頻度が低くなった(同居なし24.2%, 母のみと同居12.3%, 両親と同居11.2%)。前期破水の頻度ならびに分娩様式(とくに自然分娩)との関

係ではほとんど差がなかった。分娩経過（表-2）については、分娩時間、分娩時出血量、新生児体重などに各群で著明な差はなかった。

考 察

- (1) 子供の数の変化に伴う妊娠、分娩経過の変化は、経産回数という生物学的な見地からも説明し得るが、子供の数の変化に伴う生活環境の変化が、妊娠、分娩に与える影響についても無視できない。今回の研究で明らかとなった住居、職業の有無、コーヒー嗜好の変化などが、結果としての妊娠、分娩経過に及ぼす影響を及ぼすかについての検討が必要である。
- (2) 夫の両親との同居によって、切迫流産の頻度が減少することは、両親の何らかの援助の重要性を示唆しているし、分娩誘発の頻度の減少は、妊婦が何

かを決定しようとする時に、両親の影響力の大きいことを示しているといえる。結果としての分娩様式、分娩経過については、夫の両親との同居の有無にかかわらずほとんど差がないが、両親の援助、影響といった問題と共に、住居、職業、旅行といった諸条件の変化が関与している可能性も考えられた。

要 約

核家族化が妊娠、分娩、異常児発生に及ぼす影響を、子供の数、夫の両親との同居の有無の2点から検討した。

発表予定文献

水野正彦, 佐藤考道, 箕浦茂樹, 荻野満春
「核家族と妊娠、分娩」日本不妊学会

図-1 同居家族の内訳

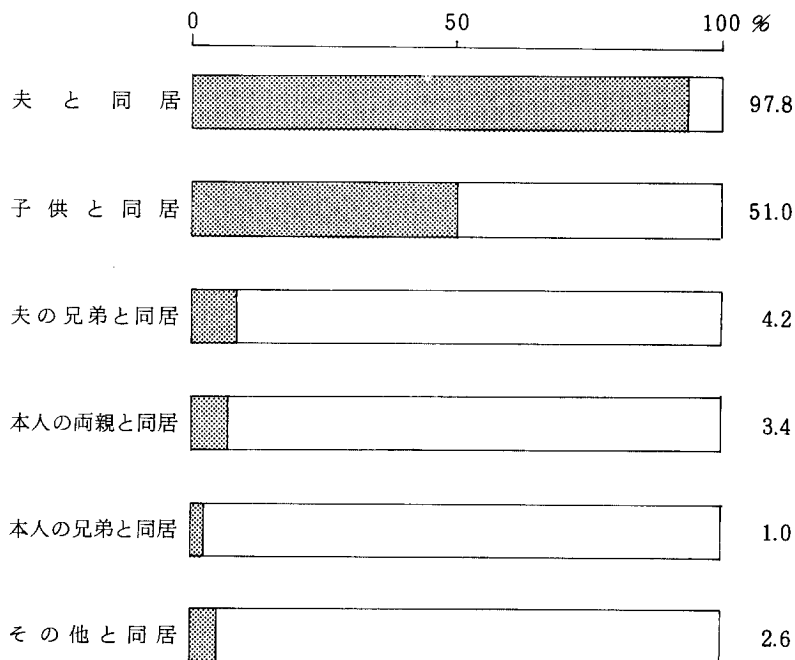
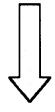


表 - 1 子供の数と分娩

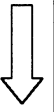
子供の数	0 (n=615)	1 (n=456)	2 (n=156)
平均年齢 (才)	27.0 ± 4.0	28.9 ± 3.6	30.9 ± 3.5
母体重(満期) (kg)	61.5 ± 7.8	61.5 ± 7.0	61.0 ± 7.1
妊娠期間 (週)	38.0 ± 5.6	37.4 ± 6.3	37.4 ± 6.0
分娩時間 (時間)	13.2 ± 21.1	6.9 ± 5.7	6.4 ± 5.4
出血量 (cc)	331.6 ± 342.9	287.8 ± 279.6	254.9 ± 329.8
児体重 (g)	3023.2 ± 506.5	3133.1 ± 529.2	3157.4 ± 551.9
児身長 (cm)	49.1 ± 2.8	49.6 ± 2.2	49.1 ± 2.9

表 - 2 夫の両親との同居と分娩

	同居なし (n=1022)	母親のみと同居 (n=65)	両親と同居 (n=152)
平均年齢 (才)	28.3 ± 4.1	28.6 ± 4.3	27.5 ± 3.5
母体重(満期) (kg)	61.5 ± 7.5	61.5 ± 7.8	61.3 ± 7.1
妊娠期間 (週)	37.6 ± 6.2	38.5 ± 4.1	38.0 ± 4.9
分娩時間 (時間)	10.2 ± 17.1	9.5 ± 6.6	9.1 ± 8.1
出血量 (cc)	305.9 ± 320.2	325.1 ± 246.6	303.2 ± 346.0
児体重 (g)	3079.9 ± 521.3	3158.1 ± 539.7	3090.4 ± 520.8
児身長 (cm)	49.3 ± 2.7	49.5 ± 2.4	49.3 ± 1.9



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

核家族化が妊娠,分娩,異常児発生に及ぼす影響を,子供の数,夫の両親との同居の有無の2点から検討した。